

間もなく夜が明ける。

これから始まる一大作戦にA R A s各員はそれぞれの持ち場へとスタンバイしていた。

「魔女」竜胆麗華も自らのエゴシエーター能力を解放すべく、独自の持ち場へとワープする。

そして、夕星自身も〈エクステンド〉のコックピットシートに身を預けた。

「頼りにしてるぜ、〈エクステンド〉」

操縦桿に触れることで、機体を動かすための情報が再び脳内に流し込まれた。ヘッドセットを介した視界も良好。通信系も問題なしだ。

『あー、マイクテス。マイクテス。聞こえているかな神室くん』

ジツというノイズの後に聞こえてきたのは未那月の声だった。

「聞こえていますよ、未那月先生。以前に使っていた変声機はもう使わないんですか？」

『使って欲しいのなら使うぞ。なんなら前みたいなのイズまみれの声じゃなくて、可愛い可

愛い藤森委員長ボイスで応援をしても』

「それは結構です」

彼女もこちらの緊張をほぐそうと冗談を混ぜてくれたのか、それとも単にふざけているだけなのか。そこが曖昧だから夕星もキツパリと断りをいれておいた。

『だったら、少し真面目な忠告をしておこうか。あの蛹の怪獣はフェイズEXのエゴシエーターだ。だから、ここから先は何が起きたとしてもおかしくない』

エゴシエーターに対抗できるのは、同じくエゴシエーターだけだ。従って麗華以外からの直接的な支援も期待できない。

加えて「陽真里のエゴシエーター能力はますます手のつけようがなくなっていくのではないか？」と未那月は予想していた。

『藤森委員長のエゴシエーター能力は端的に言うのなら「無から物質Aを創造するという過程を経て、自身の願いを叶える」ってところじゃないかな？』

言うなれば、それは夕星のエゴシエーター能力の完全上位互換であった。

夕星が〈エクステンド〉の武器を構築するためには、一度砂塵へと分解するための原料が必要になる。対して陽真里のエゴシエーター能力にはそれが不要いと言うのだ。

そうなれば必然的に能力の制約も緩み、現実には齎す影響だって大きなものと化する。

「それでも……例え、何が起こるのか分からなかったとしても、俺はヒバチを元に戻してみせます」

夕星はハッキリと答えた。今更、その程度の脅しで覚悟は揺らがない。

『そうかい。だったら、私からも一つ、神室くんに勝利の秘策を授けておこう。一度しか言わないからよく聞くんぞぞ』



『——と言うわけだ。要は神室くんの想いをしっかり届けろってことだね』

「はは……最後はだけはチープな言葉でまとめるんすね」

夕星は提示された秘策を聞き入っていたので、思わず最後の締め方に呆れてしまった。

だが、未那月も発言を撤回するつもりはないらしい。彼女は大言を謳うように続けてみせる。

『自分の意思を表明することのどこがチープなものか。君が藤森委員長に抱える感情は「恋心」と言うには重く、複雑なように見受けられる。だが、それだけ重く、複雑だからこそ、その想いをぶつけた衝撃もまた大きなものになるのさ』

それでこのふざけた「非日常」に打倒し、陽真里を元の日常に戻せると言うのなら、自分は全力で拳を握ろう。

操縦桿を一際強い力で握りしめ、夕星は軽く呼吸を整えた。

「ふう……」

思考はなるべくクリアーに保て。今はただ作戦を果たすことだけを考えろ。

蛹の怪獣を打倒し、広がる砂塵化を止める。——そして陽真里の「日常」を取り戻すのだ。

『それじゃあ、そろそろ作戦の時刻だ。A R A s 構成員・神室夕星。君の健闘に期待する』
整備区画の天井がゆつくりと開き、へエクステンドを固定したハンガーが上昇を始めた。

「電圧チェック。油圧チェック。」

夕星はコックピットに備えられたスイッチを一つ、また一つと押し込んでいった。歯車状の瞳に、躊躇いの色は混ざらない。

「エンジン回転数・正常。関節機構ロック解除。現実固定値センサーをアクティブモードへと移行」

ハンガーは完全に上がり切り、へエクステンドへは地上へと立たされた。

砂塵化の影響によって軒並みが砂に呑まれた天川市からは、夕星の知る街並みも消えて
いる。
あまのがわ

そして、朝日が淡々と広がる荒野と、最奥に見えるのが巨大な蛹を茜色に照らし出す。

その姿をキツく睨みつけ、夕星は踏^{キック}板^{ペダル}を踏み込んだ。

「さあ、いこうぜ〈エクステンド〉ッ！」